

週日の説教

金 大烈 神父 2011年5月5日(木)

《心の扉を開きましょう -光が入って来られるように-》

ある有名な絵をたとえにして何回か話をしたことがあります。私たちの心には『戸』があります。「心の扉」という言葉がよく使われますね。心には門や戸があるのです。そして、門や戸には、必ず取っ手があります。福音でよく使われる話では、心の扉の取っ手は、外側ではなくて内側にあるようです。ですから、誰かが、どんなに良いことをあげようとしても、内側にいる主人が開けなければ何もできないのです。

同じようなことを、2000年前にイエス様も経験され、そのもどかしい心が今日の福音(ヨハネ3:31-36)で表されているのでしょう。自分の命さえ捧げて、「これが真理である」、「これが真実である」、「こういう生き方をしなければならない」と訴えたのに誰も聞いてくれなかった、という話ですよ。私たちの心の中に光が入ろうとしても、私たちが心のドアを開けなければ、光は中に入ることはできないのです。

韓国にいた頃、私のところへ霊性の相談に来る人が結構いました。相談を求めに来るほとんどの人は、暗い状態で来ます。嬉しくて、聖霊に満たされている人は、相談をする必要はないのです。そのような人は、相談ではなくて分かち合う存在です。しかし、相談の依頼に来る人は、「この状態では苦しくて、生きられない。」と判断し、助けを求めて私のところまで来るのです。そのような相談に来る人々も、二つに分けられます。最初から心を開いて耳を傾ける人もいます。しかし逆に、何時間、何回話しても、心をこめて優しい言葉を使っても、「この人は心を閉ざしていて何もできない。」と思わせられる人もいます。

結局、福音の意味も、私たちがイエス様を体験できるかどうか、私たちがどのくらい自発的に心を開けようとするによって違うのだと思います。

何十年間も信仰生活をしているのに解決できない問題がある人は、神様にまで隠したい何かがあったのでしょう。そのために、神様の癒しの手が届かなかったのでしょう。そういう面を私たちはみんな持っていると思います。

イエス様が、強く、切に、私たちの心のドアをロックしているのに、私たちのほうが不安や怖さのため、恥のために、しっかり心を閉ざして、開けないようにしているのではないのでしょうか。そのようなことを振り返ってみるよい聖書の箇所ではないかと思います。

ありがとうございました。